

仲間関係の発達について

1. 発達段階

発達とは「個体発生から死に至る間の時間経過に伴う身体的・心理的諸機能や行動の変化」のことである。人の一生を見て、顕著な特徴ある変化をする時期に注目すると、次のような発達段階の区分ができる。

1	胎児期（受精後約280日間）	
2	新生児期（生後1ヶ月）	親子の情動のかかわり開始
3	乳児期（誕生から2歳）	離乳，言語発生，歩行開始
4	幼児前期（2～3歳）	自己中心性，アニミズム，運動・言語能力の発達
5	幼児後期（3～6歳）	
6	児童前期（6～8歳）	知識生活時代，メタ認知能力（自己の認識を振り返る力），ギャングエイジ，9歳の壁
7	児童中期（8～10歳）	
8	児童後期（10～12歳）	
9	青年前期（12～15歳）	疾風怒濤の時代，第二の誕生，第二反抗期，心的離乳，思春期，モラトリアム（猶予期間）
10	青年中期（16～20歳）	
11	青年後期（21～24歳）	アイデンティティ（自我同一性）
12	成人前期（24～30歳）	扶養家族からの自立，就職，結婚，家族形成
13	成人中期（30～45歳）	
14	成人後期（45～60歳）	
15	老人期（60歳～）	第三の年代

2. 3種の仲間関係

(1) ギャンググループ

・ 児童期後半、小学校高学年。徒党集団、従来ギャングエイジと呼ばれた。同一行動による一体感が重んじられ、同じ遊びを一緒にするものが仲間であるというもの。同一行動を前提とした一体感（凝集性）がもたらす親密さ。仲間集団の承認が親よりも重要になってきて、ルール破りなどをしたくなる。どちらかというとなりに特徴的。

(2) チャムグループ

・ 思春期前半の中学生、チャムグループ。サリバンの定義（現代精神医学の概念、みすず書房、中井久夫、山口隆訳、1976）、親友、特別に親密な友人、互いの共通点を言葉で確認することが特徴、「私たち同じね」という感覚。どちらかというとなりに特徴的。

・ 同質を確認し合うグループ。仲間内で秘密を共有し、誰かを仲間はずれにすることで残りの集団の凝集性を高める。個人の尊重ではなく、集団の維持を目的とする。

(3) ピアグループ

・ 思春期後半、高校生のピアグループ。互いの価値観や理想・将来の生き方などを語り合う関係。互いの異質性をぶつけ合うことによって、他者との違いを明らかにしつつ自分の中のものを築き上げ、

確認するプロセスが見られる。自立した個人として互いに尊重し合っ共にいることができる状態が生まれる。

・異質を認め合うグループ。個性の違いが一緒にいる意義になり、その集団は個人の自由に応じて出入り自由。自主性が尊重される。

ピアはチャムより大人！！

同世代の仲間関係に疲れ、同調できない生徒は、チャムよりも発達段階が上のピアを求める力を獲得してきているということである。

<チャムからピアへの移行サイン>

同世代の仲間と趣味や話が合わなくなる、秀でた能力や興味関心、趣味をもっている、グループから生意気といわれる、グループの秘密からつまはじきにされる、グループの話に入れない、グループに入れない自分に非があると感じる、グループ外のもっと視野の広い友人を求める、等。

3 . 仲間関係発達の問題と子どもの問題行動

・ギャンググループが喪失してきている。戸外で遊ばず、室内でゲームに夢中になる子どもたち。(千葉市教育センター研究紀要第17集、1987、子どものあそび環境)

・チャムグループが肥大化してきている。仲間はずれにならないようにと心掛けながら、とにかく仲間と一緒に行動し、仲間内の流行に遅れたり外れたりしないようにするといった、仲間に対する強い同調性が如実に示されている。(福富護、思春期が人生の中でもつ意味、児童心理2月号臨時増刊,3-12、1997、金子書房)

多発する陰湿ないじめ問題の背景

ギャンググループを十分に経験しないままチャムグループを形成していく中で見られるのではないかと。集団維持のためにはスケープゴートとしてのいじめが必要になる。問題の背景には学校ストレスが考えられる。そのストレスの発散の場としてのいじめがある。(佐治守夫、1995、思春期の心理臨床、日本評論社)

・ピアグループが遷延化(延び延び)してきている。最近の子どもたちは、他者との違いをはっきりと表現できなくなってきた。本来のピアグループとは違ってきている。相手の同意を探ろうとする言葉かけや軋轢を避ける姿勢が目立つ。ピアグループ課題の達成が難しくなっている。高校生段階ですら薄められたチャムグループが目立つ。大学において、ギャンググループやチャムグループをやり直す学生も多い。ゼミやサークルで仲間づくりに没頭し、その中で青年期課題を追究する本来のピアグループを経験することが可能になる。ドロップアウトの子ども、暴走族などはギャンググループのやり直しが必要になる。そうした中で遅ればせながら、チャムグループ、ピアグループへの展開が存在する面もある。いわゆる青年期の延長に伴い、ピアグループ課題も遷延化してきていると言えるのではないかと。

いじめ問題への対応

いじめは、仲間関係における親密さを求めて必死にあがいている姿の裏返しであり、自立を目指して苦しみもがいている状態といえる。大人社会は、子どもたちが真に求めている、仲間関係における本来の親密さを十二分に体験できるような環境を整えねばならない。

学校・学級不適応問題への対応～「問題」ではなく「リソース」

学校や学級に不適応を起こし、不登校や仲間とのトラブルが生じている子どもの方が帰属集団よりも一足早く次の発達段階に移行しつつある場合が多い。次のステージに早く上がることに伴う産みの苦しみともいえる。このように、仲間関係における不適応という問題を問題ではなく、より上位発達への兆しとして、つまりリソースとして活かすことができる。不適応を起こしている子どもが小学校高学年や中学生の場合、自分がおかしいのではなく、周囲がまだ幼い、自分が早く次のステージに進んだのだと気づくことで、セルフエスティーム向上につながる。

・日本特有の退行的で自己愛的なモラトリアムも、児童期、思春期のやり直しを行うという点で発達の意義がある。大学生は進学受験システムの中で児童期、思春期を送り、青年期以前に仲間関係などで安心できる人間関係を十分に体験できていない場合が多い。そのため、大学時代を社会的責任を回避した独特のモラトリアム期とみなし、サークル活動などの甘えられる仲間関係の中で心理的に退行し、そこで思春期にやり残してきた様々な役割実験を行っている。(村瀬孝雄、退行しながらの自己確立、1981、弘文堂)

<参考> 本来のモラトリアムとは？

エリクソンの提唱した、本来の積極的な心理社会的モラトリアムとは、アイデンティティ達成に向けて積極的な役割実験をするために青年が社会への本格的参加を一時猶予する状態を意味している。

・男子学生は過去に経験されないままであった思春期の発達課題である「内面的な互いの類似性の確認による一体感(凝集性)」(=チャムグループ)をグループメンバーに求め、十分にそのかわりを受け入れてもらった後、青年期の発達課題「内面的にも外面的にも互いに自立した個人としての違いを認め合う共存状態」(=ピアグループ)を求める段階に成長している。それぞれの大学生が過去に十分に経験できなかったことを、現在の発達段階に応じて補充したり、その次の段階へ移行したりと発達課題を解決するための試行錯誤がグループ体験において可能である。(保坂・岡村、1986)

構成的グループ・エンカウンター等

【参考・引用文献】

- ・指導援助に役立つスクールカウンセリング・ワークブック、黒沢幸子、金子書房、2002
- ・教育心理学 - 発達と臨床援助の心理学 -、下山晴彦編、東京大学出版会、1998
- ・キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討～ある事例を通して、保坂亨、岡村達也、心理臨床学研究4, 15-26、1986